



序章

2006年1月7日の夕方。赤坂・溜池山王の交差点にある、古いオフィスビルの一室。ガランとした会議室の中に、夕日がさしかかっている。

約束の時間から、40分が過ぎていた。これだけ待っても来ないなら、そろそろ、帰ろうかな。そう思い始めたとき、その投資家は、ドタバタと駆け込んできた。

「いやあー、ごめんなさい、本当にすみません。前の打ち合わせからどうしても抜けられなくて。はじめまして、谷家たやです。あれ？ 名刺がない。あれ、あれ？」

「いかにも」という感じの外資系金融マンが悠然と入ってくる姿をイメージしていた僕は、すっかり拍子抜けした。身長は160センチ程度の、小柄な体型。黒いリュックを肩にかけ、スーツは少し大きくてサイズが合っていないように見えた。少し伸びすぎた黒い髪も、寝癖が残っている。あえて金融マンっぽいところがあるとすれば、手に日経新聞を握りしめ、株価のページが開かれていたことか。

あすかアセットマネジメントCEOの谷家衛氏は、かつてソロモン・ブラザーズ証券で天才トレーダーとして名を馳せ、30歳でマネーシングディレクターに就任し、32歳で同社のアジア太平洋地域の自己勘定投資の責任者となった。退社後、自身でヘッジファンドを運営するほか、い

くつものベンチャー企業に出資をしていた、著名な投資家だ。

「はじめまして、岩瀬です。今日はお時間を頂き、ありがとうございます」

「岩瀬君のブログは前から読んでいて、ずっと会いたいと思ってました。だから、今日、ようやく会うことができ、すごく嬉しんですよ」

本当に嬉しそうな顔は、30代と言っても通りそうな、童顔だった。目は、爛々らんらんと輝いている。この出逢いがきっかけとなり、後に、新しい生命保険会社が生まれる。そんなことは、このときは思いもなかった。

だが、今から振り返ると、僕はこのときすでに、谷家さんの好奇心溢れる目と、人懐っこい人柄に、一目惚れしていたのかも知れない。そんな風に思う。

アメリカより日本で勝負したい

谷家さんが部屋に入ってくる少し前まで、僕はその頃いつも持ち歩いていたA6サイズの黒いモレスキンの手帳を開き、びっしり書き込まれた手書きのメモを読み返していた。そこには、それまで数カ月の間に会った、米国の金融関係者との面談内容が書かれていた。

2006年当時の米国は、サブプライム問題がきっかけとなったその後の金融危機が表面化する直前であり、金融バブル、投資ファンドバブルが最高潮に達していた。

そして、僕の留学先であったハーバード経営大学院(HBS)の学生のあいだで、もっとも持て囃された就職先が、投資ファンドだった。選ばれし者たちには、入社1年目から、30万ドルから40万ドル近い報酬が約束される。名声と金銭とを求める野心溢れる学生たちには、一度は腕試しをしたと思う格好の職場だった。

一方、僕はというと、東京にてリップルウッドという投資ファンドで「企業再生」なる仕事に携わった後、2004年28歳のときにHBSに入学するため渡米した。漠然とはあるが、卒業後は資本主義の「メジャーリーグ」である米国で自分の腕を試したいと思っていた。1年目を終えた夏休みはウォール街の名門ヘッジファンドでインターンとして働いてみた。しかし、朝から晩まで株価だけを執拗に追い続けるその仕事に、何かが違う、と感じて、その会社には就職しなかった。10週間、その中にどっぷりとつかってみて、自分が無意識のうちに職場に求めているものがクリアになった。それはファンドの仕事とは正反対だった。

一つは、素晴らしい仲間とチームで働く喜び。

小、中学はサッカー部に所属し、大学時代はジャズバンドを組んでいた僕は、明確に意識したことはなかったが、チームでワイワイ仕事をするのが好きだった。これに対して投資家の仕事は極めて孤独である。自分で調査分析をし、投資を決める。お互いには極力干渉しない。これが寂しく、物足りなかった。

もう一つは、誰も見えないところでコソコソと金儲けをするより、儲からなくてもいいから、自分は世の中にインパクトを与える仕事がしたいと思った。もともと物欲があまりないとか、目立ちたがりだという性格に加えて、留学中で芽生えた「公のため」という意識もあいまって、そのような想いを強くした。

そして最後に、人と同じことはしたくないという想いが強かった。元来、人と違うことを極度に恐れる子供だった僕は、小学校時代、5年間をイギリスの私立学校で唯一の日本人として過ごした影響か、大人になってからは、人と同じことを逆に嫌がるようになった。大学在学中に司法試験に合格したものの、卒業後に750人の同期生と共に司法研修所に入れられるということを受け入れられず、同期が2人しかいない外資系コンサルを選んだ。その後も、日本ではまだ黎明期にあった企業再生ファンドに入った。

卒業後も何か、自分にしかできない仕事をしたと思っていて、それが具体的に何だかは、このときは分かっていたがなかった。

そこで、卒業を半年後に控えたこの冬休みは、とりあえず日本に帰国し、金融やベンチャーに携わる先輩たちを訪ね、キャリアに対するアドバイスをもらいながら、情報収集を続けていたのだ。

アメリカへの帰国を数日後に控えた自分が出した結論は、いったん前職のリップルウッドに戻る、というものだった。慣れた職場で力を蓄え、貯金をし、日本で生活の基盤を整えながら、どこかのタイミングで起業する、という風に考えていた。

このような考えのもと、谷家さんに会う一日前、かつて朝から晩まで、苦難を共にしたリップルウッドの上司のところに報告に行った。僕を快く海外へ送り出してくれた彼は、帰還の報告を心の底から喜んでくれた。

時を同じくして、「君に会いたいという投資家がいる」と、別の先輩から紹介を受けたのが、谷家さんだった。この時点ではすでに卒業後の進路は確定していたわけだから、谷家さんと一緒に仕事をやる、ということは考えていなかった。あくまでも、表敬訪問のつもりでいた。

「それにしても、この会社、地味だなあ」

待たされている会議室を見渡しながら、そう思っていた。

外資系投資銀行の出身者が作った、1000億円近い資産を運用する投資ファンドが、赤坂に構えるオフィス。僕は無意識のうちに、半年前に夏を過ごした、ニューヨークのオフィスを思い出していた。

40階の高層からは、森のように生い茂るセントラル・パークを見下ろすことができた。オフィス内はモダンアートの飾りつくされており、家具も高級品。ワンフロアをたかが60名程度の社員で占有し、オフィスの中にフィットネスジムとシャワーがあった。

しかし、谷家さんのオフィスはまったく派手さはなかった。どここの会社にもありそうな、普通の事務用テーブルとイス。ホワイトボードは完全には消されておらず、前の会議の内容がうっすらと読みとれそうだ。使われていないLANケーブルが何本も放り出されている。

室内を見渡すと、贅沢は一切なく、質素で謙虚な感じがした。オフィスの内装を見れば、経営者の人柄や哲学が分かってくるような気がする。この浮足立っていない雰囲気、嫌いじゃない。そう、感じた。

プロポーズ

「これまで100社近いベンチャーに出資してきて、分かったことは、『ベンチャーの成否は人で決まる』ということ。経営者はさほど魅力的でないが、ビジネスモデルや技術が面白いと思つて出資した会社は、すべてうまくいかなかった。他方で、創業時のビジネスプランはいまいちだけど経営している人がユニークで面白いと思つた会社は、なんとか軌道修正して、うまくいった。だから、僕はもう、ベンチャー企業の事業計画は見ないことにした。すべては『誰がやるか』に尽きる」

谷家さんは、自身のベンチャー投資の経験から、そのように語りかけてきた。

「岩瀬君のブログはずっと読んできたし、前の職場の人たちからも働きっぷりは聞いている。君のように志が高く、バランス感覚のいい人間がベンチャーをやれば、絶対に成功する。君がベンチャーをやるんだったら、僕は今すぐにも投資する。考えているビジネスプランがあるんだたら、それでいい。もしないんだたら、僕の方で考えているアイデアがいくつかあるから、そ

れと一緒にやろう。僕は君が持っている才能を伸ばし、成功するのを応援したい」

僕がハーバード経営大学院に留学した2004年夏から綴っていたブログ「ハーバード留学記」は、当時金融関係者やマスコミの人の間で広く読まれるようになっていた。谷家さんも読者の一人だったようだ。

妻腕投資家に初対面でこのように言われて、一人のMBA留学生に過ぎない僕が悪い気がするはずはなかった。しかし、外資系で転職を重ねてきた経験から、目上の人に対しても少しは生意気に言い返す術を覚えていた。

「お誘いは光栄です。ただ、いま複数の投資ファンドから、条件のいいオファーをもらっているし、前職からもぜひ戻ってきて欲しいと言われています。ヴァイス・プレジデントの肩書きが約束されています」

その返事を聞いて、谷家さんは少しあきれた顔をしながら、こう言った。

「投資ファンドやらヴァイス・プレジデントやら、ハーバードMBAにまで留学して、まだそんなことにこだわっているのかい？ もうこれ以上、学歴も肩書きも、世間に認めてもらうことも必要ないだろう？ ブランドだとか世間体だとか、そんなことで進路を決めるのはもうやメなよ」

そこまで言って、谷家さんは再びニコッと笑った。

「岩瀬君。人生は、一回きりしかない。せっかく君というユニークな個性とエッジを持った人間が

生きているんだから、自分にしかできない、他の誰にもできないキャリアを、追い求めないか？」

そのとき、何か僕の中でずっと重荷となっていたものが、音を立てて落ちていった気がした。

いつの間にかどこかで、「カッコいい」とか「こうあるべき」とかを、意識して進路を考えていたのかもしれない。

でも、谷家さんの言う通りだ。一回きりしかない人生。自分にしかできない生き方に、挑戦できたら、どれだけ素敵なことだろう。

そのとき、HBSのキャンパスで目にしていて、一つの詩を思い出していた。

“Tell me, what is your plan to do

with your one wild and precious life?”

さあ、教えてください。貴方は一度きりしかない、ワイルドでかけがえない人生を、どのよう

に過ごすつもりですか？

一度しかない、ワイルドでかけがえない人生。
「谷家さんの仰る通りです。本当は今すぐにでもお願いしますが、4月まで待って頂けませんか。その時も同じ気持ちでしたら、是非一緒にやらせて下さい」

はじめて出会った、童顔の投資家とともに、新しいキャリアを歩んでみるのかもしれない。そんな想いを胸に抱きながら、雪が降り積もる冬のポストンに、帰国した。